

令和6年4月9日

南の風第55回全国ミニバスケットボール大会特集号Ⅲ

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

前号の続きです。

香岐リトルソニックスの試合を見て気づくことは、自信に満ち溢れていることです。オンザコートの5人だけでなく、ベンチのプレーヤーもスタッフも「私たちは自分のプレーをやり切るんだ!!」という信念のようなものを感じました。(応援の仕方やサポートの様子から窺えました)

これはどこから来るのかと考えると、『2年間負けなしという実績、経験』がチーム全体を支えているのでは、と思います。

今回は香岐チームのハーフコートオフェンスを中心に書きます。神奈川県代表のK Jr.との試合を取り上げます。K Jr.は令和5年度神奈川県のチャレンジカップを制し、初優勝した強豪です。4番、5番、そして19番を中心にしっかりした1on1や、多彩な攻撃を仕掛けるチームです。

香岐チームのオフェンスの中心は絶対的エースの3番です。約163~165cm、身体もしっかりとしています。1on1のスキルの高さはもちろんですが、決して独りよがりの攻めにならず、周りが空けばすかさず鋭いパスができる選手です。この試合1Qだけで20点(フィールドゴール8本、フリースロー4本)をあげました。1Q終了時(31-4)

さて、香岐チームのハーフコートオフェンスですが、私が観た中ではホーンセットの応用のように見えました。ご承知の方も多いと思いますが、ホーンセットとは基本的には、リングに向かってトップに1人、両エルボーに1人ずつ、両コーナーに1人ずつといったアライメントになります。この布陣の特徴は、両コーナーにシューターを配置することでペイントエリアを空け、そこにダイブやカットで攻めるセットオフェンスです。

このアライメントが、センターライン辺りから見て牛の角のような広がりなので、ホーン(horn)セットと呼ばれます。香岐チームは、リングに向かって11番がトップ、右エルボーに14番、左エルボーにエースの3番、右コーナー(実際はやや内側)2番、左コーナーに0番といったアライメントです。

ホーンセットはNBAでも頻繁に使われています。種類はいろいろあるのですが、香岐チームが採用していたのは、基本的なアウェースクリーン、バックスクリーン、ダウンスクリーンの組み合わせでした。私が確認できたものを紹介します。

トップの11番がボールを持っています。左ウイングにポップアウトした3番にパスした後、右エルボーから右ウイングにポップアウトした14番のDefにダウンスクリーンを掛けます。このスクリーンを利用してトップに上がった14番に、3番がパスします。そしてすかさず14番は、ダウンスクリーンの後右ウイングにいる11番にパスをつなぎます。このパスに連動して左コーナー(実際はもう少し内側)の0番が3番のDefにバックスクリーンを掛け、バックカットでゴール下にダイブした3番に14番がループパスして得点します。

香岐チームはこの攻めを簡単そうにやっているのですが、合わせのタイミング、パスの正確さ、視野の広さなど、基本スキルの習熟度が要求されるセットです。特にフィニッシュのループパスの正確さは高校レベルだと感じました。次号でホーンセットの応用をもう一つ紹介します。